・心のこえ　聴いて語ろう　ゆっくりと

・御同朋　隔てる壁は　差別心

「賀茂川の水、双六の賽、山法師、これぞわが心にかなわぬ」と平家物語に白河法皇の言葉として伝わっています。

時の最高の権力を握っていた白河法皇ですら、自分の思い通りにならなかったことがあると嘆いた一文です。「わが心にかなわぬ」とありますが白河法皇は、自分の心のことをどう思っていたのか気にかかります。

私たちは、つい「自分のことは自分が一番よくわかっている」、「自分の心に正直」などと自分の心を思い通りに扱えるものだと思ってはいないでしょうか。実は自分の心ほど自分の思い通りにならないものはありません。その思い通りにならない、どうすることもできない、苦しみが生じる心を時には分別するということもあります。

更に私たちは、何とか思い通りにするために人や物事、この世界の全てを分別してしまいます。日常、分別と言えば、生活の中で「あの人は分別のある人だ」と道徳的によい意味で使われています。この分別によって苦悩が生まれるとされます。

すなわち自分の心でもって、自分を苦しみの淵から逃れなくしてしまっているわけです。またその心は、自分だけではなく他の人に対しても、心のものさしで接していきます。

そのものさしは、決して人の苦悩を計ることはできません。計るどころか、余計に傷つけ差別することすらあります。先にも書きましたように、私たちは分別心すなわち差別心をもって生きていこうとするのです。

親鸞さまは、当時の比叡山の様子と二十年間のご修行を通じて、その人間の持つ差別心を感じ取り苦悩されました。

そして山を降りられて後、阿弥陀さまの分別のないおこころにであわれました。何があろうとも、必ず救う我にまかせよとの阿弥陀さまのおこころを聞かれ、南無阿弥陀仏となって我が身に注がれているよろこびといただかれました。

親鸞さまの流れを汲む私たちは、阿弥陀さまの平等の大悲につつまれていることをよろこび、阿弥陀さまの平等大悲の願いを聴聞しながら、共に生きていく御同朋・御同行と呼びあえる社会をめざし歩ませていただきましょう。